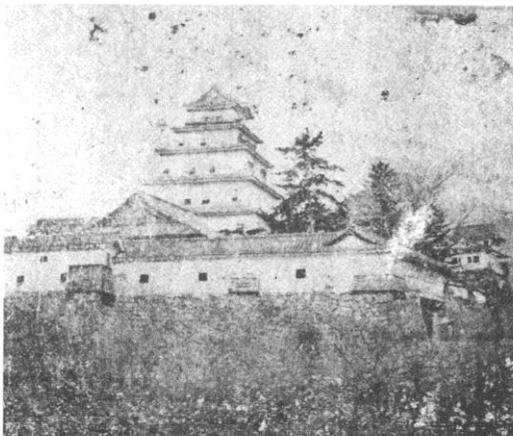


藤堂高虎と伊予

藤田 達生



高虎が創建した今治城天守の移築といわれる丹波亀山城天守古写真
(美田村頭教氏撮影・亀岡市文化資料館提供)

藤堂高虎（一五五六―一六三〇年）は、江戸時代を代表する名築城家であり、伊勢津藩三十二万石の初代藩主として著名な人物である。しかし彼が伊予に大変なじみの深い人物であったことは、あまり知られていないのではなからうか。

高虎が豊臣秀吉から大名に取り立てられたのは、今からおよそ四百年を遡る文禄四年（一五九五）に、板島（後の宇和島）で七万石を拝領した時のことであった。秀吉の死後、高虎は徳川家康との関係を強め、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いでは東軍に属して奮戦し、恩賞として伊予半国二十万石を領有する。その領地は、南予と東予を中心に、中予にも及んでいた。



福島正則の監視のために近世城郭に改修された甘崎城跡

この間、高虎は伊予各地に本格的な近世城郭を築城するとともに、近世城下町を設定し、地域経済の振興をめざした。たとえば現在の宇和島市・大洲市・今治市などの町並みの基礎は、高虎のプランによるものである。

高虎は、拠点となった板島城・大津城（後の大洲城）・今治城を築城あるいは改修したが、支城も多数配置した。現時点で確認できるのは、南予では河後森城（松野町）・石城（吉田町）・灘城（双海町）・大陰城（長浜町）・東予では小湊城（今治市）・甘崎城（上浦町）であるが、塩泉城など所在のわからないものもある。

このような城郭ネットワークを整備するとともに、高虎は積極的に地域開発に取り組んだ。延宝九年（一六八一）に森田仁兵衛が著した吉田藩領内の地誌『吉田占記』には、文禄四年十二月二日付で高虎が「とがり弥左衛門」に宛てた命令書が収録されている。それには、「無田の内、荒れ開き候におおては、その年一年作り取につかまつるべく候」と記されている。

高虎は慶長十三年に津に転封するが、その後も伊予支配に関与した。たとえば、元和元年（一六二〇）に、伊達政宗の子息秀宗が板島に所領を得て宇和島藩をおこしたが、それを徳川家康に推挙したのは高虎である。宇和島藩の支藩吉田藩の陣屋は、高虎の普請した石城をベースとした可能性が高い。

大洲城が完成したのは、脇坂安治による洲本城からの建造物移築によるものであるが、それを勧めたのは高虎であった。松平氏が松山に転封したのは、高虎が前藩主加藤嘉明を会津藩主として徳川秀忠に推薦したことによっている。今治城は、高虎が普請したものであったが、養子であった高吉（丹羽長秀の三男）が慶長十三年から二十七年



高虎が整備した大洲城下町の町並み

戸雁も務田も、ともに現在の三間町内にある。高虎は、有力農民と思われる弥左衛門に対して、開墾した田について一年間は租税を免じる。鎌下年季の許可を与えている。おそらく他の所領においても、同様に開発を奨励していたに違いない。

また高虎は、開発の前提として地主神を鎮めるために、鎮守社の復興にもつとめた。

天和元年（一六八一）に井関盛英が編纂した宇和島藩領内の地誌『宇和旧記』によると、文禄五年八月に野村三嶋神社（野村町）の「大壇越」である



津城本丸に立つ高虎像

間城主をつとめた後、寛永十三年（一六三六）からは松平氏が藩主となり、幕末に及んだ。

藤堂氏は、伊予における戦国動乱の終息から平和な江戸時代への橋渡し役をつとめた大名だったということができる。

最後に、筆者の居住する三重県津市に、伊予ゆかりの町があることを記したい。それは、津城と堀にあたる岩田川をはさんで接する伊予町である。

高虎は、城下町内部のもっとも地盤の安定した地域を、伊予から移住した町人の居住区とした。そこには町年寄加藤甚右衛門（三千石を与えられた加藤嘉明の一族）以下の屋敷が並んだ。また僧侶も移住して寺院を建立し、今日に至っている。知人の伊予町在住の僧侶も、先祖が高虎に従って今治から越してきたとおっしゃる。高虎は、これら伊予出身の人々を優遇したのであった。

ふじた・たつお 一九五八年、愛媛県新居浜市生まれ。神戸大学大学院博士課程修了、三重大学教育学部助教授。高虎研究は、伊予で育ち伊勢で暮らす私にとっての重要課題。主要著書は、「近世国家成立史の研究―日本中・近世移行期の地域構造」（以上、校倉書房。高虎についてはこれらに詳しく）、『本能寺の変の群像―中世と近世の相剋―』（雄山閣）。